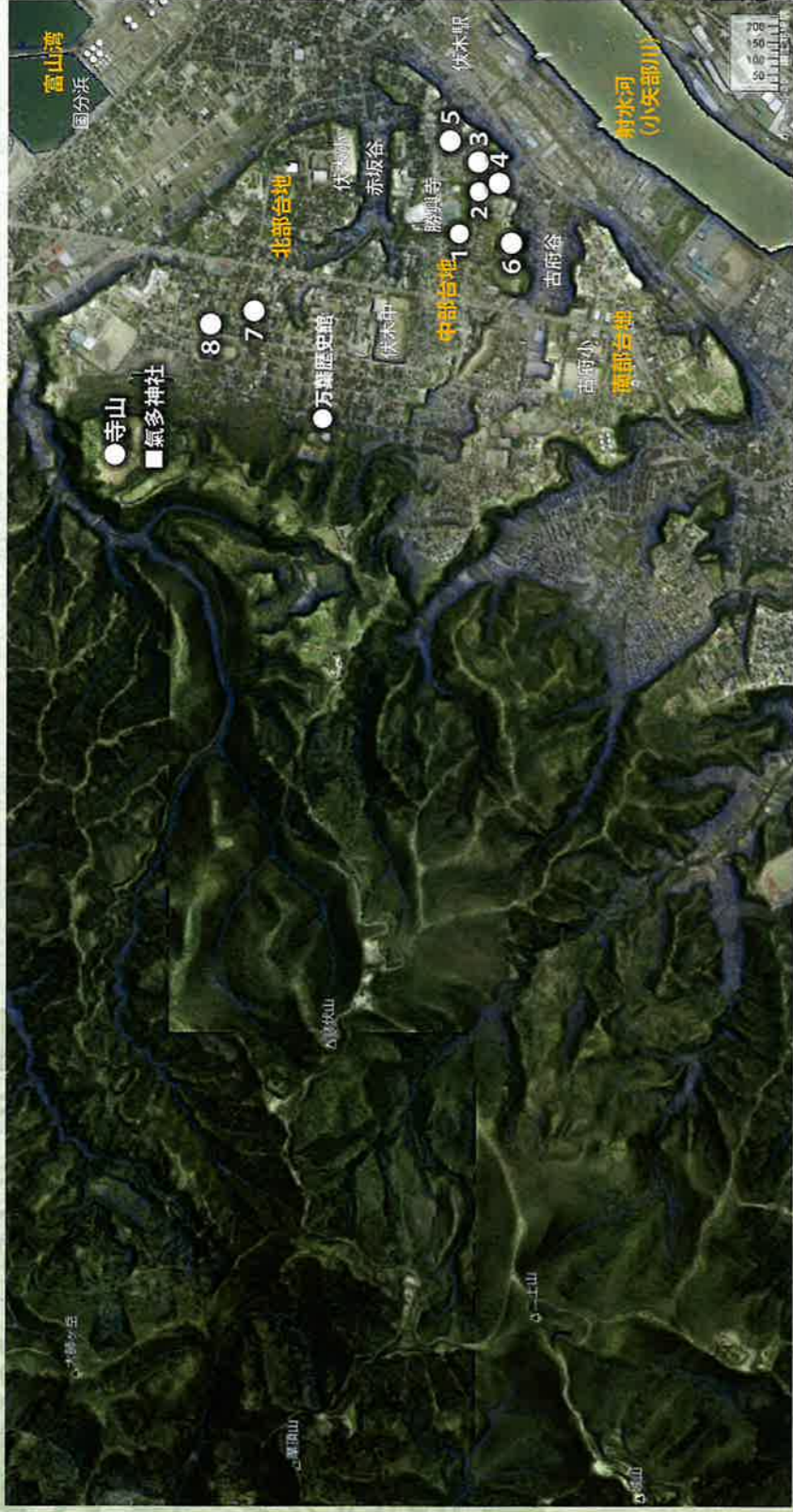


越中国府関連遺跡と推定地

奈良・平安時代の伏木は高台に古代の役所や住まいなどがあり、古府谷や赤坂谷は入り江の津湊として利用されていたと想定される。



※カシミール3Dで作成



1 下水道古府串岡地区
【国庁推定地】



2 勝興寺南接地区
【国衙(ご)推定地】



3 牧野地区【国衙推定地】



4 美野下(みの)遺跡(現越中国府跡遺跡)
【谷地形・遺物多量出土】



8 向一次(むかいいち)地区
【国分寺関係】



7 県史跡越中国分寺跡



6 御亭角(おちんかど)廃寺推定地
【国府寺推定地】



5 伏木測候所地区
【国守館推定地】

編集協力:高岡市万葉歴史館 発行:高岡市教育委員会

えっちゅうこく 越中国府

奈良時代、日本には60数ヶ国あり、それぞれに国府が置かれていた。国府とは、現在の県庁のような役所とそこで働く人の館など、様々な施設が集まった「越中の都」のことで、越中の国府は伏木地区にあった。様々な施設があったが、各施設の正確な場所はわかっておらず、確定した場所もないが、今までの研究成果を基に推定地を紹介する。

国庁推定地(国の政庁)

万葉集 巻18・4136 大伴家持
天平勝平二年正月二日に、国庁にて諸郡司たちに饗応した宴での歌一首

国庁は国守などの国司が政務や儀式を行う空間。出土した墨書土器や周辺の地名からみて、基準となる中心地と想定されること、また勝興寺境内地が国庁の敷地を踏襲していると想定されるため推定地とされる。



現在 越中国庁跡石碑(勝興寺境内地)



発掘当時 下水道古府串岡地区

国衙推定地(国の役所)

※大伴家持は万葉集に国庁や各館は触れているが、周辺の役所については触れていない。

国衙は行政事務を担い、国守や国庁の仕事を支える役所が広がる空間。勝興寺の南側には、役所跡と考えられる建物群、役所で使う硯などが見つかった。

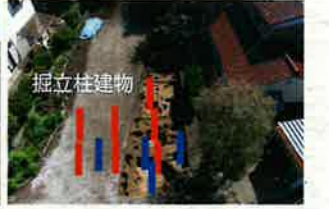


現在 駐車場、住宅など



勝興寺南接地区

発掘当時



牧野地区

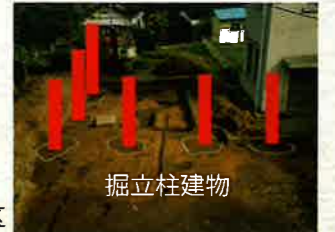
国守館推定地(都からきた貴族の住まい)

万葉集 巻18・3943~3955、巻19・4150など

国守館は都から赴任した国守が、単身赴任で住む住まいであり、活動拠点。国府の中には国司(守・介・掾・目)の館が数か所あり、万葉集にも登場する。伏木測候所地区の成果では、奈良時代の国守館を証明する出土品や遺構はなく、あくまで推定地である。



現在 高岡市伏木気象資料館



発掘当時 伏木測候所地区

掘立柱建物

越中国府の仕事道具と文字

国府には越中国内から集まる多くの地図や記録、荷物の荷札が集まり、それを一つ一つ記録する役人がいた。役人が使っていた硯や、昔の人が書いた文字資料を紹介する。

陶器の硯（すずり）

古代の役人は焼物の硯を使った。数人で硯を囲む「円面硯」と、個人で使う「風字硯」があり、越中国府では朱墨が残る須恵器の蓋を再利用した転用硯もあり、文字を書ける人が多くいる識字層が集まった空間であったことがわかる。



墨書土器（ぼくしょどぎ）

墨書土器とは、古代の人が器に所有者がどこの誰であるかを墨で書いたもの。この1つの文字が、国府の施設の場所や、どんな人物が生活・仕事をしていたかを知るキーワードとなる。

墨書土器「傳厨」



美野下遺跡(現在の越中国府関連遺跡)出土

勝興寺南側の谷部で出土。土器には、『傳厨』とあり、『傳』は郡が経営した「伝馬」を置く駅家、『厨』はその食事を作る厨房を意味すると考えられ、馬を使った人の宿泊・休憩所が近くにあったことが想定される。

墨書土器「南□」



美野下遺跡(現在の越中国府関連遺跡)出土

勝興寺の南側で出土。勝興寺境内地を基準にして、小字名「東館」、「西」と、「南□」墨書の存在を考えると、方向の基準となる古代の国府が勝興寺境内地にあったことが推定される。

越中国府の食卓

奈良時代の越中国府には都の貴族が常にいて、都で流行した高級な食器を越中に持ち込んだ。文化的なサロンであった国司の居宅での饗宴を通じて、地元郡司も都の文化に親しみ、その食卓は華やかなものであった。



越中国府関連遺跡出土の瓦・土器類

中国大陸の輸入陶磁器（ゆにゆうとうじぎ）



白磁 美野下遺跡(現在の越中国府関連遺跡)、越中国府関連遺跡勝興寺南接地区 出土

中国大陸から生産され日本に輸入された貿易陶磁器。輸入される量も限られ、高級品であった。都の貴族が赴任した国府の施設内や、有力な寺院で使われた。

緑釉陶器（りよくゆうとうぎ）



緑釉陶器・皿 美野下遺跡(現在の越中国府関連遺跡)出土

中国の青磁を真似て作られた、京都北部や滋賀県、山口県で生産された鉛釉をかけた緑色の陶器。焼成に手間がかかり、大量生産ができない高級品で、都の貴族に広く愛され、地方では主に赴任した国府や有力な寺院で使われた。

灰釉陶器（かいゆうとうぎ）



灰釉陶器・瓶 美野下遺跡(現在の越中国府関連遺跡)出土

植物の灰薬で自然釉をかけた平安時代に東海地方で生産された陶器。大量生産ができ、比較的安価で地方の有力者も入手しやすく、国府・有力寺院の他に、地方の役所や寺院でも使われた。

須恵器（すえぎ）と土師器（はじぎ）

須恵器 登り窯で焼いた灰色の土器。日本各地の窯で同じような形の土器が大量生産された。一般庶民の食卓にも使われ、国府の宴会に大量に使われた。

土師器 登り窯や覆焼で焼いた褐色・白色の土器。火や熱に強い特徴を持つが、器面がすぐにザラザラになり、劣化しやすい。